

1 資料名 「私もいじめた一人なのに・・・」(出典 あかつき)

2 資料の概要と教師の願い

本資料はいじめにおける実体験を綴った中学生の作文である。自分が標的にされることを恐れ、いじめに同調してしまう弱さをもつ一方で、いじめを憎む勇気と正義感をもち合わせる筆者。これはいじめの構造の中で多くを占める第三者の典型であり、生徒は共感的に受けとめることができる。と考える。

中学生になると「いじめはよくない」と理解しつつも、見て見ぬふりをし、関わりを避ける者が大半である。そこで、この資料を通して、自己中心的な考えから脱却して、社会に生きる一員として、いじめをはじめとした差別的言動を許さない、勇気を出して止めるなど、自ら積極的に実践できる生徒を育てたい。



3 授業の実際と生徒の反応

授業では、初めに「菌回し」はだめだと分かりつつも、自分もみんなと同じようにしてしまう心の葛藤について考える場をもった。その後、ある事件をきっかけにいじめている男の子に立ち向かっていく主人公の心の変化を考えさせた。授業後の感想では、「いじめをやめさせることができる自分になりたい」「いじめは絶対にしないようにしたい」などの意見が多く、勇気を出して正義の実現に努めたいと意欲を高めることができた。

～生徒の感想より～

- ・私もいじめを止めたいと思っていても、勇気が出ずに止めることができなかった経験をしたことがあります。「やめて」と言うのが自分になりそうだけれど、いじめを見てはよりはずっとよいと思います。「いじめは、見ている人もいじめ」と親に言われたことがあります。いじめられている人がいたら絶対に助けたいです。
- ・改めていじめはあってはならないと思いました。絶対にいじめる側にならないように、強い心をもちたいと思います。いじめは自分一人がなくそうと思ってもなくなりません。みんながそのような気持ちになればよいと思います。

1 題材名 「自分にできること」

2 活動の概要と教師の願い

電車の中で、二人組の男にからまれ困っている若い女性と、一緒に乗り合わせた四人の言動を書いた資料を用いて、話し合いを行った。明らかに困っている人がいる状況で、自分は、どのような行動をとることができるかを考える機会にしたいと考えた。その後、この状況を、いじめの場面と見立て、「傍観者」に焦点を当て再び話し合いを行った。「関わりたくない」「嫌な思いをしたくない」など、傍観者の気持ちを考えることで、関わりを避けることは何の解決にもならないことに気付かせたいと考えたからである。



3 授業の実際と生徒の反応

授業では、四人の言動に対して「真っ先に二人組に注意をした主婦の勇気が素晴らしい」「助けたくても暴力的な行為はだめだ」など、それぞれの行動のよさやマイナス面を話し合うことができた。「傍観者」に対しての話し合いでは、「助けたくても何もできないこともある」「心でどれだけ思っているのに、行動しなかったら何もしないのと同じだ」と、活発な意見交換が行われた。

～生徒の感想より～

- ・いじめに気付いているのに何もしなかったら加害者と同じだと思いました。私は、自分もいじめられるかもしれないけれど、側に居てあげたいと思います。
- ・自分は、いじめが起きたら何か行動できるかどうか自信がありません。でも、助けたいと思っても、行動できなかったらだめだと思いました。
- ・私は、助けてあげたいけれど、話しかける勇気や行動に出る勇気がないことがよくあります。でも、これからはしっかりと行動できるようになりたいです。
- ・困っている人がいたら助けたいのはおかしいと思います。だから、気付いているのに知らない振りをしている傍観者は、加害者と同じだと思いました。
- ・勇気をもつということは大事なことだと思いました。行動に移すことの大切さも感じました。自分にできることは、勇気を振り絞って注意することだと思いました。